第１号　令和８年４月６日

校長室より

「二松から飛翔へ」～ 一期一会 ～

二松学舎大学附属高等学校
校長　鵜飼敦之

2026（令和８）年度　始業式
～満開の桜から新緑の芽吹きへ～

桜の花散らしの風が舞う中、元気に登校する生徒たち。新たに８名の先生方をお迎えし、二松學舍大附属の新年度が始まりました。新クラスで担任発表がされると、各教室から歓声が聞こえてきました。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

九段界隈では満開の桜も週末の花散らしの雨で花も散り始め、変わって新たな芽を出し始めました。日本ではこの季節に多くの草や木が生長を始めます。私たちの学校も新しい学年のスタートを迎えることになりました。皆さんも二松でのこれまでの生活を踏まえ、さらに成長・発展させるよう取り組んでくれることを願っています。

新生活をスタートするにあたって考えてほしいことを話します。

事にあたって何をやるのか？　なにからやるのか？　ということを考えてみましょう。

アメリカの大学の授業での一コマを紹介しましょう。

授業の中で、教授が一つの瓶を取り出し、まず大きな瓦礫を中に入れて学生に問いかけました。「これでいっぱいだろうか。」学生たちは「イエス」と答えます。次に教授は、小石を取り出して瓶に入れました。小石は瓦礫の隙間に入り込みます。再び「これでいっぱいか」と問うと、学生たちは少し考えながらも「イエス」と答えました。すると教授は今度は砂を入れ、同じように問いかけます。今度は多くの学生がためらいながらも肯定しました。しかし最後に、教授が水を注ぐと、瓶はなお、それを受け入れました。

そこで教授はこう語ります。「この瓶は人生を表している。最初に大きな瓦礫、すなわち本当に大切なもの（家族、健康、志など）を入れなければ、後から入れることはできない。小石や砂のようなもの、仕事や雑事などに先に時間を費やしてしまえば、本当に大切なものが入る余地はなくなる。」

この話が伝えるのは、「時間や人生には限りがあるからこそ、何を先に満たすかを考えることが重要である」という教訓です。すなわち優先順位の大切さです。日々の忙しさの中で、つい「砂」や「水」ばかりに追われがちですが、まずは「自分にとって何が瓦礫なのか」を見極めることが大切だと教えてくれます。

皆さんの毎日も同じです。スマートフォンやゲーム、何となく過ごす時間、それらが決して悪いものばかりではありませんが、それらはこのエピソードで言うならば、いわば「砂」や「水」にあたるでしょう。もしそれらから先に埋めてしまえば、今の皆さんにとって本当に大切なもの、勉強、部活動、仲間との時間、そして自分の将来を入れる余地がなくなってしまいます。最初に入れるものは人によって違いますが、少なくとも「自分がどう生きたいか」という軸に関わるものです。

論語の章句の中にも、このことと近い内容を説いたものがあります。

「其の事を敬して、其の食を後にす」

直訳すると、その事（仕事）を丁寧・慎重に行って、その食事（対価・給与・待遇）は後回しにする。ということですが、本来、仕事やなすべきことを最優先にし、報酬や個人的な利益は後回しにせよ、という教えです。「仕事をやってもいないうちから報酬のことを口にするな」ということですね。何が重要なのかを考えようということです。

何を大切にするのか、どんな人間になりたいのか。その「志＝目標」が定まっていれば、瓶の中に何から入れるべきかは、自ずと見えてきます。逆に、志が曖昧なままだと、目の前の「砂」や「水」に流され、気がついたときには、本当に入れたかったものが入らなくなってしまうのです。

高校生活は、まさにその順番を自分で決める時期です。忙しい毎日の中で、ぜひ一度立ち止まり、自分に問いかけてみてください。「最初に入れるべきものは何か」と。その大切なものから、先に入れていく、その積み重ねが、皆さんの高校生活を豊かにし、確かな人生を形づくっていくはずです。

１年の始まりにあたって、高校２年、３年の今、何をすべきか、みなさん一人ひとりが考えてみてください。